愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第13号，pp. 23～ 30（February，2010）

『奈良の学習法』を支える日常的な学習指導

― 奈良女子大学附属小学校での実践を通して ―

蜂須賀　　渉（愛知教育大学大学院　教育実践研究科・教職大学院）

The Daily Study Guidance which support “The Way of Studying in Nara”

― Through the Practice in Elementary School Attached to Nara Women’s University. ―

Wataru HACHISUKA（Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education）

要約　木下竹次が提唱した「学習は学習者が生活から出発して生活によって生活の向上を図るものである。学習は自己の発展それ自身を目的とする。」（「学習原論*1」自序）という『学習法』の精神は，『奈良の学習法』として，当時の奈良女子高等師範学校から現在の奈良女子大学附属小学校まで，受け継がれている。

学校として『奈良の学習法』を受け継ぎながら授業を行い，子どもたちを伸ばしてきたのは教官である。ここで，あらためて，奈良女子大学附属小学校の各教官が，当然のこととして行っている日常的な指導に注目する必要がある。

筆者は，奈良女子大学文学部附属小学校（文部教官）教諭として，平成７年４月から平成13年３月までの６年間，小学１年から小学６年まで持ち上がって指導した。（１学年２学級：月組・星組）

本稿では，筆者が日常的に指導してきた「朝の元気調べ」「毎日の日記」「自由研究発表」「子どもが進める授業」等の「手法」を紹介する。通常の研究発表会参観や学校参観では気づくことのできない指導の要所である。これらの「手法」は，各教官が附属小学校の伝統的経験と実践的経験・感覚的経験を融合して生み出したものである。

なお，本稿における「日常的な学習指導」は，筆者なりに『奈良の学習法』をとらえ，実践したものであり，他の教官との相違点があることを付記しておく。

Keywords：奈良の学習法，木下竹次，奈良女子大学附属小学校

はじめに

現在の学校で行われている教育が，「知識注入主義」「教育技術の方式化」「教材の構造化」に陥り，教育本来の目的を見失っているのではないかと危惧される。このような教育状況の中では，木下竹次の「合科学習」，重松鷹泰の「奈良のプラン」の精神を学び直す必要があると考える。

１　木下竹次の合科学習

木下竹次は，奈良女子高等師範学校附属小学校主事であった大正８年から昭和15年までの期間に，『学習法』の礎を築き，全国に広めた。この『学習法』は，木下竹次の著書である「学習原論*1」「学習各論*2」に詳細に記されている。

木下の『学習法』は，彼の著書により全国に広がり，奈良女子高等師範学校附属小学校で実践された。奈良女子高等師範学校附属小学校における大正11年の参観者は10,684名，大正12年の参観者は20,512名，大正13年の参観者は21,539名にも及んだ。大正11年に創刊した機関誌「学習研究」は，現在も奈良女子大学附属小学校から継続発行している。

ところが，昭和12年の日中戦争以後は，戦時下であり，国粋主義，全体主義が台頭し，自由主義，個人主義は外来思想として排斥されるようになる。大正期以来の児童中心主義教育に対する批判が厳しくなってくる。

２　重松鷹泰の奈良プラン

重松鷹泰は，戦後の昭和22年から昭和27年まで奈良女子高等師範学校附属小学校主事として，「奈良プラン」という教育計画を確立した。教育の目標を「人間として強い人間」の形成に求めた。この「奈良プラン」は，当校の研究発表会や当校の機関誌「学習研究」で論じられている。

昭和27年の新学制実施により，奈良女子高等師範学校附属小学校は奈良女子大学文学部附属小学校として，「奈良プラン」を継承しつつ，新しく再出発した。

３　平成10年の学習指導要領における総合的な学習の時間

平成元年の学習指導要領における生活科の導入に続き，平成10年の学習指導要領からは，総合的な学習時間が創設された。

ところが，「総合学習」の本来のねらいが十分に理解されず，多くの学校において，「社会体験活動」「生産活動」「発表活動」等の活動自体が注目され，「学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度」が培われなかった。

奈良女子大学文学部附属小学校は，平成16年の国立大学の独立行政法人化に伴い，国立大学法人奈良女子大学附属小学校となった。

４　平成20年の学習指導要領からの総合的な学習の時間

PISA2006の結果や，全国学力・学習状況調査により，子どもたちの学力について，基礎的・基本的な知識や技能を実生活で活用する能力や，学習に対する意欲や態度について課題があることが明確になった。では，総合的な学習の時間のどこに課題があったのであろうか。

総合的な学習の時間は，木下竹次の合科学習，重松鷹泰の奈良プランの理念を継承したものと言える。ところが，その理念の実践のためには，学校の高い教育力，指導者の高い授業力が必要であった。多くの学校では，先進校の学習形態を模倣するにとどまらざるを得なかった。そのため，総合的な学習の時間が形骸化し，体験活動や発表活動の場となってしまった。

５　奈良女子大学附属小学校における筆者の「脳死臓器移植」の実践

筆者は，奈良女子大学文学部附属小学校（文部教官）教諭として，平成７年４月から平成13年３月までの６年間，小幡肇（文部教官）教諭とともに，小学１年から小学６年まで持ち上がって指導した。（１学年２学級：月組・星組）

ここでは，筆者の代表的な実践事例の中のひとつを紹介する。『奈良の学習法』の具体的な授業の様子を述べてから，このような授業に至るまでの「日常的な学習指導」を述べる。

（１）「脳死臓器移植」の実践のきっかけ

筆者は，平成11年４月～６月に，第５学年において，「脳死臓器移植」の実践を行った。

Ｔ男の春休みの自由研究に，「脳死臓器移植」があった。実は，その年の２月に日本で初めての「脳死臓器移植」が行われた。翌日の各新聞社の朝刊は，「脳死臓器移植」が中心であった。以後，新聞・テレビは過熱報道の一途をたどり，子どもが目にする機会が多くあった。

「脳死臓器移植」は，医学技術の問題にとどまらず，法律上の「死」の問題，費用や保険の問題，患者やドナーのプライバシーの問題など，多方面に渡っている。また，「臓器移植」そのものは，「ドナーの死」があって初めて成立するのであるが，子どもは，「ドナーの死」についての理解が少ない。そこで，「脳死臓器移植」を教材として取り上げ，「生と死」を真正面から見つめさせたいと考えた。

◇Ｔ男の自由研究発表前日のＴ男の日記

「子どもの臓器移植について」

ぼくは見ていないんだけど，今日ニュースで，こんなことを放送していたらしい。お母さんに教えてもらった。それとは，３才の子どもがいたんだけれど，その子は，生まれつき心臓が片方しか機能していなかったのだ。日本でも２回ほど手術したんだけど，だめだったのだ。お医者さんは，臓器移植をしないと治らないと言われたそうだ。

ここまで３年は，チューブなどをいっぱいつないで生きられていたんだ。そして，この子は，お母さんとお父さんといっしょに，アメリカへ子どもの臓器移植をしに行った。お金は，寄付してもらったのだ。しかし，アメリカへ行っても，３才ぐらいの子で臓器移植ができる子なんていなかったのだ。そして，アメリカで待っている間に，とうとうこの子は死んでしまった。アメリカへの飛行機の長旅も，心臓にふたんがかかっていたと思う。

（中略）アメリカの場合，病院のほうから，「この子の心臓をください」と言うことがゆるされている。早く日本も，そういうふうになってほしいな。子どもでも，どんどん移植ができるようになってほしい。

今なら，やった所で退院までに670万円で，移植を受けた年の１年間は，なんと1100万円かかる。合計で，約1700万円になる。これは，高すぎる。それに，心臓移植には保険がきかない。（中略）日本も，どんどん移植できるようにしてほしいな。

◇Ｔ男の自由研究発表前日のＨ子の日記

「脳死について」

明日，Ｔ君の「脳死」についての発表があるそうなので，そのことについて，お母さんが簡単に教えてくれました。

「あなただったらどうするか？」

ということが問題です。

私がもし，脳死状態になったとしたら，私は移植していいです。なぜかというと，何も分からず，ただ息だけして寝ているだけだったら，何人かの命を救って死んだほうが，自分は分からなくてもいいと思います。反対に，もしお母さんが脳死状態になり，私に「どうしますか」と聞かれたら，どうしよう！　きっとそれは，答えられないと思う。

もらったら，また元気になれるという人のほうになって考えてみたら，きっとそれは，自分の思いと同じように思っているんだから，あげるほうはやっぱりあげたほうがいいのかな？と思います。先生だったらどうするんですか。

アメリカでは，ずっと昔から，もう脳死になったら移植と決まっているそうです。けど，ドナーカードに書いてなかったらどうなるの？　書いてなくても決まってるの？

（2）グループ追究の方法

グループ活動では，子どもの活動の自主性は尊重するが，追究内容まで自由にさせてはいけない。授業として価値ある活動を展開するためには，教師が追究の方向を見据えておかなければならない。教師の力強い指導により，学習活動が活性化できる。

何について追究していけばよいのかを，具体的に決定する。他のグループとの重複がある場合は，視点を変えて示すか，一方のグループに集約し，他方のグループからは除外する。追究する内容を焦点化し，10個程度の研究テーマを設定する。

ここでは，次のような研究テーマを設定し，1グループ４～５名で追究活動にあたらせた。

Ⅰ　臓器移植について（臓器移植法を含む）
Ⅱ　脳死の判定基準について
Ⅲ　脳死と植物状態の違いについて
Ⅳ　臓器移植の種類について
（どんな臓器の移植ができるのか）
Ⅴ　日本の臓器移植の歴史について
Ⅵ　外国の臓器移植のようすについて
Ⅶ　最近の臓器移植について
Ⅷ　ドナーカードについて
Ⅸ　臓器移植の費用と保険
Ⅹ　患者やドナー，家族の気持ちとプライバシーについて

グループ追究時の教師の支援がたいへん重要である。筆者は，次の点に留意しながら，積極的にグループの支援をした。

① グループ追究時（数時間程度）に，どのような資料で調べ，どのようにまとめていけばよいかを，教師が子どもに示した。
② 子どもが準備することが困難な資料は，教師が準備した。ここでは，「脳死臓器移植」の現場に直接携わっている社団法人「日本臓器移植ネットワーク」のご厚意により，数多くの資料がいただけた。また，実際の担当の方のお話しを直接お伺いすることができた。
③ グループ巡視指導を繰り返した。「追究の視点がズレていないか」「他のグループとの関係づけることができるか」を確認し，グループ追究の方向を修正した。
④ 方眼模造紙（３～５枚程度）へのまとめ方や発表の仕方を具体的に指導した。そして，グループ発表の練習指導をする。寸劇をするならば，衣装や小道具の準備をさせた。
⑤ 学級全体で話し合いたい「問題（視点）」を予め考えさせた。「ここまではわかったけれど，ここからがわからない。」という新たな問題（視点）を提示し，学級全体で話し合って深めるのである。この「問題（視点）」は，グループ発表の際に示した。
⑥ あわせて，グループ追究の内容や進度を考慮し，グループ発表の順番を決めた。

（3）グループ発表（学級全体での話し合い）の仕方

１グループの発表に１時間を設定する。グループで司会を担当する。

最初の10分間程度を発表とする。方眼模造紙を読むだけではいけない。わかりやすく，印象深く，問題（視点）を明確にした発表になるように工夫する。

発表の後，おたずねを受ける。「質問」「意見」などが混ざっていてもよい。指名は，グループで司会がする。難しいおたずねで，自分以外に知っている友だちがいたら，答えてもらえばよい。

教師は，話し合いで出された「問題点」「意見」などを関連づけて板書する。必要に応じて，切り返す。

授業の最後の５分間程度は，「今日の発表でわかったこと」をノートに書く。

◇ グループ発表当日のＮ子の日記

「臓器移植で助かる命」

私は，移植ってすごいことだなと思いました。たった一つの自分の体の中のものをあげると，一人まるごとの人の命が助かる。私がもし脳死になってしまったら，そのままにしてはおけません。絶対移植してあげます。（中略）死んだ私は，これからも生きる確率のある人の命にはまさらないのです。だから私は，その移植を待っている人に臓器をあげます。私の体の中から取られても，しょうがないと思います。それは，次の時代，その次の時代でも生きていける人への，命に関わった未来の人へのプレゼントです。

脳死になってしまったら，ものを考えられないけれど，これ以上活躍できない！などと思ってはいけない。その人がドナーなら，その人の臓器は，だれか知らない人の体の中で働いている。それは，うれしいことだとは思いませんか。

もし私が，あげるほうじゃなくて，もらうほうだとしても，私は臓器を移植してくれた人に感謝します。

私は，意思表示カードに，心臓が停止した死後，腎臓と膵臓を提供すると書きました。署名年月日とか本人署名とか家族署名とか，いろんなことをくわしく書かなければいけないので，びっくりしました。

◇グループ発表当日のＭ子の日記

「脳 死」

今日は，脳死移植について，私がどう思っているかを書く。

脳死っていうものを本当に「死んだ」と認めていいのか。私は，良いと思う。なぜなら，呼吸だけさせていても，脳が動いていなければ，一人で何もできない。

反応しない。（中略）

次に脳死移植を提供した人，された人のプライバシーは守ったほうがいいと思う。例えば，新聞に，臓器を提供した人のことが「今日，８時36分頃，〇県〇市△町のＡＢＣさんの臓器が移植されました」と書かれていると，私が家族なら，

「自分の家族の一人が本当に『死んだ』というんだな。今，〇〇病院でその一部が動いているんだ……。もう，本当の持ち主は……。」

とすっごく悲しい思いを，もう一度味わわなければいけない。きっと（私でも），二度もそんな思いはしたくないはず。だから，勝手に新聞やテレビに出さずに，承知をもらってからやったほうが絶対に良いと思う。脳死移植をするのは賛成。でも，細かな部分については，反対の所がある。

６　奈良女子大学附属小学校における筆者の「日常的な学習指導」

前述の「脳死臓器移植」の実践の「追究活動」「発表活動」の表面だけを見ると，「自由追究」「発表会」と見えるであろう。ところが，この「追究活動」や「発表活動」を充実させるためのポイントは，日々の学校生活，学級活動の中にある。よほど注視しなければ，見えない。これらの指導なくして，奈良女子大学附属小学校の実践はあり得ない。

ここでは，筆者が日常的に指導し，子どもを伸ばしてきた手法を紹介する。

（1）毎朝の「元気調べ」

「元気調べ」とは，朝の会の中で，全員の子どもに発言の機会を与えるものである。「出席確認」「健康調べ」も兼ねている。

具体的には，教師（または日直の子ども）が，座席の順番に子どもを指名していき，指名された子どもが返答する。その際，「はい。ぼくは元気です。」「はい。私は元気です。」などの自分の健康状態に加えて，クラスのみんなに紹介したいことをお話しする。

【具体的な「元気調べ」の様子】《低学年》

Ｔ：Ａくん。

Ａ：はい。ぼくは元気です。今日，登校の途中で，パトカーを見ました。サイレンを鳴らしていました。ぼくは，どうしてあんなサイレンの音なのかなぁと思いました。

Ｔ：Ｂさん。

Ｂ：はい。私は元気です。きのう，お母さんといっしょに，スーパーへお買い物に行きました。お母さんは，「本日限り」の安い物ばかり買っていました。私の家は，４人家族なのに，10人分ぐらい買っていました。びっくりしてしまいました。

Ｔ：Ｃくん。

Ｃ：はい。ぼくは元気です。きのう，公園で遊んでいるときに，公園のすみの土の中から，たくさんの芽が出ているのを見つけました。誰かが植えたわけではないのに，どうして芽が出てきたのかな？誰かが教えたわけではないのに，どうして春だということがわかったのかな？　とても頭がいい芽だなぁと思いました。

Ｔ：Ｄさん。

Ｄ：はい。私は元気です。朝，学校で友だちと遊んでいるときに，モンシロチョウを見ました。鉄棒のところで３びき，学級園で５ひき見ました。アゲハチョウにも，きてほしいです。

Ｔ：Ｅくん。

Ｅ：はい。ぼくは，ちょっとしんどいです。朝，熱を測ったら，37度を超えていました。今日の休み時間は，静かにしています。（以下，略）

毎朝，全員に発表させることが大切である。継続することにより，子どもの表現力は，しだいに伸びてくる。

１年生に入学したてのころや，低学年のうちは，教科的な内容のしばりのない「朝の会」で発表を経験させる。この経験を通して，「発表の楽しさ」を味わうことになる。発表者は，話題の中心である。いわば，この瞬間のスターである。

多くの小学校では，「１分間スピーチ」と称して，毎日，２～３名程度の発表をさせ，形式的なおたずねで終えている。しかし，このペースによる「１分間スピーチ」では，次回，自分の順番がくるのは，いつのことであろうか。毎日，発表する機会を設ける必要がある。

また，学年や時期，学級集団の質により，適宜，おたずね（質問）を入れるようにする。初めのうちは，次のような，単純なおたずねであろう。

Ｔ：Ｆさん。

Ｆ：はい。わたしは元気です。きのう，友だちと遊びました。楽しかったです。また，遊びたいです。

Ｇ：誰と遊んだのですか？

Ｈ：何をして遊んだのですか？

Ｉ：どこで遊んだのですか？

このようなおたずねが毎回あるようであれば，子どもは，おたずねを予想して「元気調べ」を発表するようになる。前のＦの「元気調べ」は，次のように発表されるようになる。

Ｆ’：はい。わたしは元気です。きのう，私の家で，まゆちゃんとるりちゃんとトランプで大富豪をして遊びました。楽しかったです。また，いろいろなトランプゲームをして遊びたいです。

子どもは，お互いに学習している。このとき，教師は，「誰と，どこで，何をして遊んだかがよくわかりますね。とても，じょうずに発表できましたね。」と推賞する。他の子どもは，どのような発表をすると教

師に褒められるかがわかり，努力するようになる。

あわせて，教師もおたずねをする。子どもは，どのようなおたずねがよいのかわかっていない。教師が学年に応じた適切なおたずねをして，手本を示すようにする。

Ｊ：はい。ぼくは元気です。きのう，お母さんと図書館に行きました。エルマーの本が読みたかったからです。ちょうど，「エルマーとりゅう」があったので借りました。「エルマーのぼうけん」は，前に借りて読みました。

Ｔ：Ｊくんは，エルマーが好きなのですね。とてもすてきですね。Ｊくんは，エルマーのどこが好きですか？　エルマーの本は，ほかにもありますか？

初めのうちは，「理由」をおたずねするのではなく，「何」「どこ」など，子どもが具体的に答えることができるようなおたずねがよい。

また，次回の「元気調べ」に向けての目標をもたせる。

Ｔ’：明日の「元気調べ」のときに，エルマーの本をみんなに紹介してあげましょう。

Ｔ”：Ｊくんが好きなところの絵を描いて，みんなに見せてあげましょう。感想をお話ししてあげましょう。

子どもは，「元気調べ」のために準備をするようになる。絵を描いたり，感想文を書いたり，たくさんの本を借りてきたりする。口頭での「元気調べ」から，具体物を伴った「元気調べ」になり，そして，準備された「元気調べ」になっていく。何回も発表練習をしてくる子どももでてくる。子どもは，「元気調べ」を楽しみにするようになる。

（２）毎日の日記指導

日記は，毎日書くものである。入学したての１年生でも，始業式の日から日記を宿題として出す。毎日，書き続けると，書く力を格段と向上することができる。

「ひらがなも教えていない新１年生には，無理ではないか。」「教科書でひらがなを教えてからにしたほうが，よいのではないか。」と反論があるだろう。しかし，子どもの実態を見ると，ある程度のひらがなが書ける子どもがいることも事実である。個に応じて，無理のないように，強制ならないように扱えばよい。

１年生にも，国語のノートと同じマス目のノートを日記帳として与える。最初は，書ける子は１ページを目標とする。あまり書けない子は，自分の名前だけでよい。しだいに，友だちの名前や，学校の名前，ものの名前を書かせればよい。ほとんど書けない子は，教科書を見て，「あいうえお」などと五十音を順番に書けばよい。新１年生は，個人差が大きい。個に応じた目標設定による日記でよい。

子どもが一生懸命に書いてきた日記である。その日記に，褒めことばを朱書きして返す。書いてきた日記に対応する内容でもよい。場合によっては，関係ない褒めことばでもよいと考えている。

【書いてきた日記の内容に対応する「朱書き」の例】

『おともだちと　なかよく　あそべて　よかったね。』

『やさしい　おねえさんだね。うらやましいなあ。』

『おいしい　はんばあぐで，おなかが　いっぱいになったね。』

【書いてきた日記の内容に関係ない「朱書き」の例】

『せんせいの　おてつだいを　たくさん　してくれてありがとう。』

『おおきな　こえで　へんじが　できましたね。とても　りっぱです。』

『きょうの　せいかつの　べんきょうは　たのしかったね。』

子どもが書いてきた日記は，常に肯定的に見る。否定的に見ない。教師は，すぐに間違い探しをしたがる。「字体」とか，「はね」「はらい」などを気にして，指導したくなる。しかし，必要以上に指導ばかりしなくてもよいと考える。まず，書いてきたことを褒める。あまり訂正が多いと，子どもの意欲を失わせる。必要に応じて，朱書きのお手本を示せばよい。

子どもが書いてきた全員の日記帳は，毎日，その日のうちに返す。しかし，小学校の学級担任は，基本的に空き時間がない。では，子どもが毎日書いてくる日記を，いつ見ればよいのであろうか。読むだけではなく，朱書きも入れるとなると，多くの時間が必要となる。目の前に子どもがいるときは，日記を見るよりも，子どもを見ることのほうが大切である。

私は，次のように時間をつくって見ていた。

①　朝の会の前

子どもが登校したら，運動場に遊びに行く前に，日記帳を開いて出すように言っておく。教室で登校してくる子どもに「おはよう。」と声をかけながら，日記を見る。慣れてくると，出された日記をその場で読んで，すぐに朱書きができるようになる。その子に，日記の内容で声をかけ，褒めることもできる。すると，子どもも，朱書きを読んでから遊びに行くようになる。この時間で，約半数程度の日記が見れると，あとが楽になる。

②　休み時間

休み時間は，前時の授業の事後指導や次時の授業の準備がある。子どもと遊ぶこともある。また，子どもの話を聞いたり，トラブルの解決を図ったりすることもある。子どもが先生を必要としなくなったタイミングで，できる限り日記を見る。お昼の休み時間でも，子どもとかかわりながら，少しでも多くの日記を見る。しかし，子どもとのかかわることが優先である。子どもを無視して日記を見ていては，本末転倒である。

③　給食の時間

給食の準備が終わり，「いただきます。」の後，急

いで給食を食べる。子どもが食べ終わるまでには，時間がかかる。このときを利用して日記を見る。たくさんの時間がとれるチャンスである。この時間で，なるべく多くの日記を見てしまう。

（3）毎学期行う自由研究発表

ここで言う「自由研究発表」は，「子どもが追究してまとめた結果を，全体の前で発表し，話し合うこと」である。教科・領域は限定しない。一般の小学校における「夏休みの自由研究」に似ていると言える。

自由研究発表を，春休み・夏休み・冬休みの宿題として位置づける。１年生は，５月のゴールデンウィークに，初めて宿題として出す。すると，１年間に３回の自由研究発表をすることになる。研究内容は，子どもの興味・関心のあるものでよい。

この自由研究発表のねらいは，次のようである。

【発表者につけたい力】
- 自分の問題を追究する力
- 方眼模造紙にまとめる力
- わかりやすく発表し，「おこたえ」する力

【学級全体につけたい力】
- 友だちの研究の問題点や疑問点を見つける力
- 友だちの「おたずね」や「おこたえ」にかかわる力

自由研究発表を方眼模造紙にまとめる。枚数は指定しなくてよいが，概ね，低学年は１～２枚，中学年は２～３枚，高学年は３～４枚が適量であろう。カラーの方眼模造紙もあるが，その必要はない。

最初のうちは，鉛筆で下書きをしてからペンでなぞる。しかし，回数を重ねて慣れてくると，下書きなしで書けるようになる。方眼模造紙に書くのに多くの時間をかけるのは無駄である。

方眼模造紙の書き方として，次のことを教える。
- タイトルは太く大きく書く。色つきペンを使ってもよい。
- 小タイトルは，番号をつけ，色つきペンを使う。
- 黄色など，遠くから見えにくい色つきペンは使わない。
- 本文は，小さな方眼に一文字ずつ書く。一行ずつ空けて書くとよい。
- ペンを使うときは，新聞紙を下にしいて書く。

方眼模造紙へのまとめ方は，教科により違うが，最初はこだわらなくてよい。まとめ方のよい自由研究発表を大いに褒めることにより，しだいにまとめ方に慣れ，質があがっていく。実物の自由研究発表を通して，具体的に示せばよい。

自由研究発表は，全員に発表させる。３学期制の場合であれば，春休みの自由研究発表は１学期中に，夏休みの自由研究発表は２学期中に，冬休みの自由研究発表は３学期中に行う。一人に１時間をかけるとよいが，多くの時間はとれない。

私は，特に時間をかけて扱ったほうがよい自由研究発表には，一人に１時間をかけた。内容が教科に関係するものであれば，教科の時間として設定した。それ以外の自由研究発表は，１時間に３人の自由研究発表を行った。その際は，内容がなるべく関連するものにする。一人に約15分間の時間をとることができる。

一人で１時間の自由研究発表の例を示す。「話し合いが活性化せず，１時間ももたない。」としたら，研究発表の「しかけ」が悪いからである。

休み時間のうちに，黒板に方眼模造紙を貼っておく。黒板の半分以上は板書で必要なので，方眼模造紙が３枚以上になる場合は，教室前面の壁やロッカー，教室横の窓枠などにも貼る。

最初の10分間程度を発表とする。方眼模造紙を読むだけではいけない。発表の仕方を指導しておく。例えば，次のような発表の工夫ができる。
- 実物や試供品を準備し，見せたり，試したりする。
- 友だちに協力してもらい，問題点を焦点化する寸劇を見せる。
- 「ここまではわかったけれど，ここからがわからない。」という新たな問題点を指摘し，みんなで考えてもらう。

発表の後，おたずねを受ける。「質問」「意見」などが混ざっていてもよい。教師は，この自由研究発表から広がる価値ある内容を見つけ，投げかける。教科の内容に入り込むとよい。ここでも，発表者を中心にして話し合う。指名は，発表者がする。難しいおたずねで，自分以外に知っている友だちがいたら，答えてもらえばよい。おたずねに困った際も，自分で助けを求める。

私は，おたずねする子を立たせていた。挙手ではないので，「はい！」「はい！」という騒々しさがなくなる。学級全員発言を目標としていた。

話し合いで出た「問題点」「意見」などを関連づけて板書する。焦点化したい内容は，強調して示した。また，内容に関連のある教科のノートに，自由研究発表の記録をとる。授業の最後の５分間程度は，「今日の自由研究発表でわかったこと」を書く。

発表が終わった方眼模造紙は，順次，教室内や廊下などに掲示していく。教室内外が方眼模造紙でいっぱいになる。授業参観，保護者会なども，この状態で迎えればよい。

（4）授業の進行役を子どもに委ねる

研究授業や普段の授業を録音（録画）して，じっくりと聞く（見る）と，教師が多くの時間で発言していることに驚く。子どもの発言が教師の期待しない内容であると，否定的な反応を示したり，他の考えを発表するように促したりする。授業の展開が少しでも横道にそれそうになると，教師の期待する方向へ流れを修正しようとしている。このような授業を繰り返してい

ては，子ども自身で授業の軌道修正ができなくなってしまう。若干の寄り道はあっても，子ども自身で本時のねらいに迫ることができるようにしたい。

「朝の会」や「学級会」などは，子どもが司会をすることが多い。しかし，通常の授業でも，進行役を子どもに委ねるとよい。教師の「指示」や「説明」が減り，子ども中心の授業を展開することができる。

「本時の授業のねらいからそれてしまう。」と心配するかも知れない。数多くの機会を与え，子ども自身で学習を進めていく力をつけるのである。子どもを鍛えるのである。

私は，１年生から，授業の進行役を日直（男女１名ずつ）に委ねていた。１年生から鍛えることである。日直が進行役を務めることにより，全員を鍛えることができる。

最初から，すべての展開を委ねることはできない。初めは，「指名」が中心である。授業の重要な部分では，教師が発言することにより，授業を切り返したり，焦点化したりする。子どもは，教師の出を見て，「切り返し」や「焦点化」の仕方を学んでいく。しだいに，教師の発言は減っていく。１年生から鍛えると，１年生後半になるころには，教師の出は少なくなる。

子どもは，日直が大好きである。その日の「主役」である。

私は，４年生からは，授業の進行役を「教科係」に委ねた。「国語」「算数」「理科」「社会」など，それぞれの教科の特性に合った授業展開が可能となる。

国語：音読，言葉へのこだわり，思いの読み取り，感想交流

算数：既知と未知の比較，答え合わせ，おたずね，意見交換

理科：予想，実験や観察の方法，結果の発表，結果の考察

社会（しごと）：問題の焦点化，資料の扱い，自由研究発表，おたずね

４月当初に，その学年の前期の教科係を決める。学級全員がいずれかの教科係になる。「国語」「算数」「理科」「社会」係は，授業の進行役（司会者・板書者）としての出番が多い。「音楽」「造形(図画工作)」「体育」「家庭科」係は，自らが先頭に立って動く機会が多い。子どもは，自分の好きな教科や，進行役をしたい教科を選ぶ。

「国語」「算数」「理科」「社会」係は各６人程度，「音楽」「造形」「体育」「家庭科」係は３人程度にする。10月には，後期の教科係を決める。本人の希望があれば，再任を妨げない。

初めは，どの教科係も戸惑う。教師が適切な場面で支援をすることにより，教科係はその手法を学んでいく。教科に見合った学習展開にするために，４月から数ヶ月程度は，教師が積極的に出ることである。遠慮してはいけない。そして，しだいに教師の出番を減らす。司会者を事前に指導しておいたり，学級全体の学習（集団学習力）を推賞したりする。４年生後半にもなると，教師の出番はほとんどなくなる。

「学級会」などでは，子どもが板書をすることが多い。私は，４年生から，授業の進行役である「教科係」に板書も委ねた。通常の授業でも，子どもが板書することは可能である。

子どもが板書することにより，授業が子どもの力で展開できるので，教師は教室の前面にいる必要はなくなる。教師は，常に学級全体を見守ることができる。教室の中を自由に動き回ることができる。個別指導にあたることや，司会者・板書者の支援をすることが可能となる。

「国語」「算数」「理科」「社会」係は各６人いるので，司会者２～３名，板書者２～３名を交代して行う。板書者は，一人の発言を一人が受け持つ。次の子の発言をもう一人が受け持つ。最初は，教師が手本を示し，支援をする。授業を通して，「要約の仕方」「板書する位置」「関係づける示し方」「色チョークの使い方」等を教える。しだいに，見やすい板書ができるようになっていく。子どもに任せる場面が多いほど，子どもは伸びる。

私の教室の机の配置は，「コの字型」にしていた。お互いの顔を見ながら発表・発言ができるので，話し合いがしやすい。

日直（司会）の席は，前面の中央なので，学級全体を見渡せる。低学年の日直は，一日中，日直席で過ごす。

高学年の授業では，司会席に教科係（司会者）がすわる。板書者は，黒板の左右にイスを用意してすわる。

７　奈良女子大学附属小学校における筆者のその他の実践

子どもを伸ばすための教育は，一面的ではない。今回，ここで紹介した「日常的な学習指導」以外に，筆者が特に実践していたことを簡潔に紹介する。

（１）算数における「邂逅学習（かいこうがくしゅう）」

「邂逅学習」とは，実際の地域社会や社会事象の中に数多く見出すことができる「子どもの知的好奇心を喚起する事象」（学習材）との邂逅（出会い）から，子どもの興味・関心の方向に沿って展開する学習のことである。ただし，子どもの興味・関心の方向が定まれば，必ずしも最初の事象にこだわり続ける必要はないと考えている。

筆者の「邂逅学習」の実践事例は，「学習研究」誌に掲載されている[*3]。

（２）「なかよし」「しごと」における「校外班別見学学習」の実践

充実した「かかわり合い」のある学習活動を展開す

るためには，子ども同士の「学び合う姿勢」のある良好な人間関係，学級集団にする必要がある。

筆者は，「校外班別見学学習」を通して，各教科の学習内容自体を深めるとともに，好ましい学級集団づくりに努めた。

筆者の「校外班別見学学習」の実践事例は，「学習研究」誌に掲載されている[*4]。

なお，奈良女子大学附属小学校として最近の研究実践には，「新訂・『奈良の学習法』確かな学力を育てるすじ道[*5]」，「『学習力』を育てる秘訣 ― 学びの基礎・基本 ― [*6]」がある。

8　実践のまとめ

木下竹次・重松鷹泰の流れを受け継ぐ奈良女子大学附属小学校の『奈良の学習法』は，優秀な実践者により伝統的に引き継がれており，子ども自身が伸びる教育が効果的に行われている。これは，学校全体の継続的な取り組みによるところが大きい。

しかし，一般の公立小学校が，短期的な目標により，形式的に『奈良の学習法』を真似ても，うまくいかないことが多い。奈良女子大学附属小学校では，全教官の共通理解のもと，「子ども主体の活動」が，全校的に実施されている。「なかよし」活動も，それにあたる。

ここで紹介した「日常的な指導」は，筆者の実践である。今後は，奈良女子大学附属小学校の他の教官の「日常的な指導」と筆者の「日常的な指導」との共通点や差異点を明確にし，これらの「指導の技」を理論的に検証していく必要がある。

〈＊参考文献〉

1　木下竹次『学習原論』〈大正12年：目黒書店〉
　再版　中野光 編〈昭和47年：明治図書〉

2　木下竹次『学習各論』
　〈（上巻）大正12年，（中巻）昭和３年，
　（下巻）昭和４年：目黒書店〉
　再版　〈昭和47年：玉川大学出版部〉

3　筆者の「邂逅学習（かいこうがくしゅう）」の主な実践事例として，次のものがある。

（1）「生きる力を育む数学学習 ― １年『ボーリング遊び』を通した邂逅学習 ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№361，PP.44～49）〈平成８年６月号〉

（2）「テレビと長さ・時間の邂逅学習 ― ２年『長さ』と『時刻と時間』の並行学習 ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№364，PP.44～49）〈平成８年12月号〉

（3）「『高おに』で邂逅する『長さ』の学習 ― １年『長さくらべ』の実践より ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№368，PP.50～55）〈平成９年８月号〉

（4）「総合的な学習の構築とその課題 ―低学年の事例を通して ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№371，PP.12～17）〈平成10年２月号〉

（5）「『大阪ドーム』で邂逅する算数学習（上）― ３年『表とグラフ」と「大きな数」の並行学習 ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№373，PP.44～49）〈平成10年６月号〉

（6）「『大阪ドーム』で邂逅する算数学習（下）― ３年『表とグラフ」と「大きな数」の並行学習 ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№374，PP.44～49）〈平成10年８月号〉

（7）「『総合的な学習の時間』と算数の接点」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№376，PP.18～23）〈平成10年12月号〉

（8）「『平城京』で邂逅する算数学習 ― ４年『平城京へ行こう（面積）』を通して ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№378，PP.44～49）〈平成11年４月号〉

（9）「地域のイベントで邂逅する算数学習 ― ４年『およその数』『折れ線グラフ』を通して ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№380，PP.52～57）〈平成11年８月号〉

(10)「高学年における邂逅学習（算数）の展開 ― ５年『合同な図形』『面積』を通して ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№385，PP.52～57）〈平成12年６月号〉

(11)「『世界の旗』との出会いから」（奈良の学習法：「総合的な学習」の提案，PP.144～151）〈平成10年：明治図書〉

4　筆者の「校外班別見学学習」の主な実践事例として，次のものがある。

（1）「One Day Freeの経過と展望（上）― 高学年の学級づくりの核として ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№387，PP.38～43）〈平成12年10月号〉

（2）「One Day Free の経過と展望（下）― 高学年の学級づくりの核として ―」（奈良女子大学文学部附属小学校：学習研究№388，PP.38～43）〈平成12年12月号〉

5　奈良女子大学文学部附属小学校『新訂・「奈良の学習法」確かな学力を育てるすじ道』〈平成20年：明治図書〉

6　奈良女子大学文学部附属小学校『「学習力」を育てる秘訣 ― 学びの基礎・基本 ―』〈平成15年：明治図書〉